

---

# 怨情 2

勝目博

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怨情 2

### 【Nコード】

N8387D

### 【作者名】

勝目博

### 【あらすじ】

前作で霊界へと旅立つことを拒んだ弘子……。その復讐は、親友の耳にも届く事件となった……。

## 序章。消えぬ友情

美子は退屈な日々を過ごしていた。美術大学を卒業後、東京では有名な画廊に就職した。

芸術家の才能には恵まれなかったが、どうしてもその方面に進みたかった。

幸いなことに、作品の知識では誰にもひけを取らなかった。

誰の作品で、いつの時代、どこで制作され、被写体は誰だと、殆どの作品を言い当てられた。

その才能を高く評価され、今の画廊に就職したのだ。

美子は世界の画廊を飛び回り、作品の商談をする自分を夢見ていた。ところが実際には、画廊の受付嬢に過ぎなかった。

決められた時間から時間まで、受付カウンターに座り、来客の案内をする。

これでは、作品の知識があっても生かせない。美子はそう思っていた。

美子は現代的な美人である。化粧美人なのだ。

スッピンになれば眉もなく、肌もかなり荒れているように見える。

元々は美人よりも、かわいい部類に入る。ところが美子は、かわいいと言われるが嫌だった。

子供の頃ならばともかく、大学を卒業してまで言われると、

馬鹿にされているように聞こえるのだ。

その為、わざと化粧を濃くし、大人びた雰囲気を出そうと、必死に模索していたのである。

その理由もあってか、入社後直ぐに受付嬢に任命されたのだ。

同僚などは羨ましがったが、美子は愛想がよければ誰でも出来る仕事、と馬鹿にしていた。

今日も、得意客の大手企業の重役が、絵の購入のために訪れた。二ヶ月に最低でも一作品は購入するお得意さまだ。

本当ならば、美子が売り込みをしたいほどだった。

『この作品はお買い得です』とか『これは値段の割には価値が無い』などと。

時には、発掘した新人の作品なども売り込んで見たかった。

しかし、会社には会社の方針がある。

買い付けた作品は、どんな事しても、高く売り込まなければならなかった。

それがたとえ駄作だと分かっているとしても。後は、デパートの購買担当に月刊誌の取材。

デパートはイベントの一つとして、良く利用していた。

有名画家や売出し中の新鋭作家の作品を、かなり大量に仕入れている。

月刊誌の取材も頻繁に訪れた。

来社する雑誌社は多岐にわたる。純粋な美術雑誌からイベント情報誌。

社長のクローズアップの取材から、求人誌に至るまで、月の間に何社も訪れた。

午前には社長の奥さんが訪れ、午後は社長の愛人と噂のあるモデルが、

ブランド品で身を固め当たり前のよう訪れた。良くある事だ。

結局は、変化に富んだ日々発見の仕事、とはかなりかけ離れていたのだ。

しかも、一日座り続けてお客はこれだけ・・・。

玄関ホールには、監視カメラがある為、あくびも出来ない。

そんな毎日に、美子は苦痛さえ感じていた。しかし、時代は就職難同期の卒業生にも就職浪人が数多くいて、美子は半ば諦めていた。

今日も無駄な時間を過ごしたと、思いながら、美子は家路についた。途中で一人きりの味気ない夕食をとり、疲れきってアパートにたどり着いた。

肉体的疲労ではない。精神的な疲労で、回復するにはかなりの時間

がかかりそうだ。

美子はあまりテレビを見ない。美術雑誌を読み漁るほうが好きだった。

この前の休日に買った雑誌を広げ、ベッドに寝転んだ。

そこには、最近噂の新人画家の作品特集が掲載されていた。

アメリカ人の若手で、まだ二十七歳の金髪の美男子である。

抽象的な作品ではなく、写実的な絵だった。

動物や魚の絵が多く、ファンタジーさえ感じさせた。

美子はその画家と商談する自分を思い浮かべ、食事に誘われる場面まで思い描いた。

つい、声を出して笑いそうになった。しかし、美子は考えた。

もしも、会社がこの画家と契約し、彼が来日すれば、会える可能性があるのではと……。

また、笑いそうになった。まんざら受付嬢も悪くないかも、とまで思い始めた。

美子は慌てて鏡を覗いた。今から気にしてもしょうがないのだが、想像してしまった以上、鏡を見ずにはいられなかった。

「まだ、落としてなかった」

鏡の美子はまだ化粧顔だった。

シャワーを浴び、丹念に化粧を落とし、ピンクのパジャマに着替えてベッドに戻った。

栄養クリームを顔に塗りながら、ふと、床に置かれた新聞に、

金髪画家に名があるのが目に入った。

テレビ番組欄に、ゲスト出演と書かれていたのだ。放映開始までまだ時間はあった。

ニュース番組だが、特集として組まれたようだ。美子はテレビの前に陣取った。

心はわくわくしている。そして、今か今かと待ちわびていたのだ。番組が始まり、メインキャスターが今日の内容を話し始めた。

「今日は特別ゲストをお招きしております。取材に当たったニュー

ヨークの柳さん、

そちらはどうですか？」

「はい、こちらはただいま昼ですが、ご覧のようにギャラリーの入場を待つ市民で一杯です。

これからも、人気の高さが伺えます」

「ありがとうございます。では、のちほどマイクをお渡しします。

この特集の模様は、九時二十分頃の予定です。その前に、国内のニュースをお送りします」

「もう、早くやってよ」

美子はテレビに小さなぬいぐるみを投げつけた。

しかし美子は、チャンスとばかりに台所に向かい、紅茶のティーバツクを取り出した。

シャワーで喉が渴いていたのだ。お気に入りのマグカップに、なみなみとお湯を注ぎ、

こぼれないように静かにベッドまで持ってこようとした。

しかし、美子はカップを落としそうになった。溢れたお湯が足にかかったが、

美子は動じなかった。その理由はニュースにあった。見出しには

『女性の変死体見つかる』

と、書かれていた。そしてその変死体として発見された被害者は、親友だった弘子を落としたいれようとし、退学していったあの女だったからだ。

## 1章（1）

美子はニュースを見て美大時代を思い出した。仲の良かった弘子。美人なのにそんなことなどおくびにも出さなかった弘子。勉強も教えてくれた弘子。

美子はまた涙ぐみそうになった。弘子が死んだ後、美子はしばらく立ち直れなかった。

まさか親友が殺されるなど、思いもしなかったのである。

しかも、皆から好かれていたはずの弘子が殺されるなど、想像すらしなかった。

それから美子は勉強に集中した。悲しみを紛らわせるためにも、勉強だけを考えた。

お陰で今の美子があるのも事実だった。しばらくして、雄二の死と美奈子の死も知った。

このとき美子は何故か胸を撫で下ろしたのだ。そして『罰が当たった』と思った。

その事件で美子は弘子と決別できた。安らかに、と願いながら……。その二人も、不思議な死に方をしたはずだった。そして今回も変死体だ。

美子は、弘子の怨念が生き続けているのではと思った。

弘子は自他共に認める、一途な性格だったからだ。

美子は誇りまみれの卒業名簿を引つ張り出した。

今では、あまり交友はなくなったが、自分と弘子の共通の友人がいた。里美だ。

三人は美大時代とても仲が良かった。

当時の写真は、ほとんどがこの三人の写真で埋め尽くされていた。

もちろん弘子が死んでしまうまでの話だが、いつも一緒だったのは事実だ。

しかし、弘子との死を境に、里美との間は離れていった。

どうしても二人でいると、弘子の話ばかりになるのだ。

それに耐えられなくなり、やがて里美とは挨拶程度の仲になってしまった。

里美は卒業後、実家に戻ったはずだ。そう思い名簿を引っ張り出したのだ。

まだ時間的にも迷惑のかかる時間ではない。美子は思い切って里美に電話した。

里美の母親だろうか、優しくそんな女性が電話に出た。

美子は美大の同級生で、里美の友達だったと女性に告げると、結局は実家に戻らず、東京で就職したと教えてくれた。

連絡先をメモに残し、美子は丁寧にお礼を言ってから電話を切った。しかし、直ぐにはダイヤルできなかった。あれからかなりの時間がすぎている。

もし、誰かと一緒だったら？もし、疎遠になった自分を悪く思っていたら？

そんな考えが頭をよぎり、受話器を持ち上げることが出来なかった。でも、何故かは分からないが、心の声は里美との深い関係は残っている、と告げていた。

美子は慎重にダイヤルを回した。どこにかけるのもそうだが、初めての番号には緊張する。

「はい、もしもし」

里美の声だ。美子には直ぐ分かった。

「もしもし、里美？」

「美子？」

たったそれだけの会話でも、里美も美子の声を忘れてはいなかった。

「うん。……実は……」

「美子も見ただのね？」

里美の言うことは直ぐ理解できた。

「会える？」

美子は尋ねた。



「明日は土曜、私は休みよ。美子は？」

「私もお休み。じゃあ、明日？」

「いいわ、お昼前に私から連絡するわ。十一時頃。いい？美子の番号を教えて」

美子は自分の番号を教えた後、小さく呟いた。

「ごめんね」

「謝る事など何もないわ、明日ね」

里美はあの頃と少しも変わらない。

里美は三人の仲では、お姉さん役だった。一番背も高く、大人びていたのだ。

弘子は世間知らずのお嬢さんで、美子は泣き上戸のわがまま娘。

そんな二人をいつもカバーしたのが里美だった。何があってもあの絆は消えやしない。

電話の応対で美子にはそれが分かった。そして知らず知らずに美子は涙を流した。

## 1章(2)

十一時きっかりに里美から連絡があった。時間に正確だった里美は、今でも同じだ。

待ち合わせの場所と時間を決めて、里美は電話を切った。それ以外の余計な話は一切しない。

話は会った時にすればいいのだ。里美は無駄なこととはしない性格で、その性格も変わりはないかった。

待ち合わせ場所は美子が決めた。里美曰く、『美子は初めての場所だと、迷うでしょう』だ。

どちらかと言えば、方向音痴なのである。それでも美子は早めに家を出た。

待ち合わせに遅れるのは、美子の得意技だったが、今はもう社会人だ。

少しはしっかりしたところを、里美に見せたかったのだ。

ところが、美子が早く着いたにも関わらず、

里美の前には既にコーヒークップが置かれていた。

里美は直ぐに気がつき、美子に手を振った。その時数人の男が振り向いたが、

美子には理由が分からなかった。席に近づくと、里美は立ち上がり、美子を抱きしめた。

長身の体はすっかり大人の体になっていた。張りのあるバストはふつくらと上を向き、

くびれたウエストは腰に向けてなだらかな曲線を描いていた。

ヒップは程よく丸く、きゅっと持ち上がっていた。美子が見ても惚れ惚れするスタイルだ。

何人も男が振り向いた理由が分かった気がした。

皆、里美は男と待ち合わせと思っていたのだ。

「元氣そうね」

と、席に着くと里美が微笑んだ。向き合った里美の顔は、一段と美しくなっていた。

しかし、嫌味な印象は少しも感じない。洗練されたキャリアウーマンそのものだった。

「里美も、随分大人びて・・・」

「美子も綺麗になったわ、でも、お肌の手入れを怠っては駄目よ」  
里美の言葉はちつとも変わってはいなかった。やはりお姉さんだ。  
美子は溢れる涙を抑えられなかった。

「泣き上戸は直ってないのね」

そう言う里美の言葉に美子は笑ったが、涙は止まらない。

可笑しな表情だっただろう。里美はそんな美子を、愛しそうに見つめるだけで、

決して責めようとしなかった。美子には、里美の目にも涙が見えた気がした。

その後は昔話に花が咲き、楽しそうに話す二人は、店の中でも一際注目を浴びていた。

もしもこれが夜だったら、声をかける男は、後を絶たなかったであろう。

昔話が弘子の話になったとき、初めて里美も悲しそうな目をした。

「昨日のニュースで思ったの、弘子はまだ復習しているのかなって」  
里美はそんな言葉を呟いた美子をじっと見てから尋ねた。

「弘子は一途だったからね。でもそうだとしたら美子はどうしたいの？」

「分からない、でも、もし弘子が苦しんでいるのなら、なんとかしたい」

何が出来るか分かりはしないが、ほっとくわけにはいかない。美子はそう思っていた。

「実はね、私も昨日のニュースでそう思ったの。だから電話が来たとき、

直感で美子だと分かったのよ」

やはり二人、いや、弘子も入れて三人の絆は途切れてはいないと美子は改めて思った。

もしかしたら、弘子が離れた二人を引き合わせたのでは、とも思えた。

「とにかく、ちょっと調べてみましょう」

「どうやって？」

「雑誌の編集者は、警察にもコネがあるの」そう言つて里美は片目を瞑つた。

美術雑誌の編集者に警察のコネがあるとは思えなかったが、美子は里美に一任した。

その日の夜、事件の続報が流れた。それによつて、猟奇事件から、怪奇事件へと発展し、

様々な憶測が飛び交つていた。報道局の調べでは、遺体は極度にミイラ化しており、

当初発表の死後一週間を、はるかに上回るものだった。

ところが、その被害者と、五日前に食事をした男性が現れたのだ。

警察の見解では、たった五日であるような遺体にはなるはずがないとの事で、

その男性も徹底的に調べられたのだ。

ところが結果はシロ。その男性には、覆せないアリバイがあつた。

仕事でニューヨークに行つていたのだ。帰国してから事件を知り、警察に届け出たらしい。

そして怪奇事件へと発展した。美子が緊張した面持ちで画面を見ている時、

電話が鳴り出した。

美子は飛び上がった。本来は怖がりなのだ。電話は思ったとおり里美だった。

「見た？」

「今見ているの」

「私も、見ていて思い出したの。雄二も似たような発見状況じゃな

かった？」

美子も思い出した。当時のニュースもかなり騒がれていたと。雄二も骨と皮の状態で発見されたのだ。一緒に居た美奈子は気が狂い、病院で息を引き取り、結局、理由も原因も分からずに、謎を残したまま処理されていたのだ。

その後、何も報道されないのは、捜査に進展がないからだと思っていた。

「やっぱり弘子と関係あるのかしら」

正直なところ、里美は半信半疑だったのだ。

しかし、美子との交友を取り戻すチャンスと思い、話に乗っただけだった。

警察は弘子との接点に気がついていない。

この被害者が、昔、弘子を落としたことを知らない。

「私、雄二の事件を調べ直すわ。美子は生きていた頃の弘子のことを調べて。」

「えっ、何を調べるの？」

「そうね、弘子の持ち物とか、実家に聞いてみてもいいわね。

後、あのアパートがどうなったとか……。出来る？」

「分かった。やるわ」

美子は答えに熱がこもっていた。心の中では、弘子のためだと言い聞かせていたが、

退屈な日々に訪れた一大イベントだと思い、やる気になっていた。

## 1章(3)

里美は実は警察とのコネを持っていたのだ。コネというよりも、恋人がいたのだ。

もちろん美子には知らせていない。相手はごつい体に怖い顔。

二人が並べば美女と野獣そのもので、警視庁の殺人課に席を構える中堅の刑事だった。

里美が大学に入学して間もない頃に、二人は出会っていた。

美人で大人びた里美は、大学の帰りに暴漢に襲われたことがあった。その時助けたのが、その刑事で、当時はまだ交番勤務のパトロール警官だった。

肉体的被害はなかったものの、上京したての里美には、ショックが大きかった。

その時親身になってくれたのがきっかけで、今では堂々と付き合っていた。

美大時代には、里美の独りよがり過ぎなかったが、卒業後二人は急速に接近したのだ。

怒ると怖い、里美に怒ったためしはなく、とにかく里美には優しくかった。

里美は美子との電話を切った後、早速連絡を入れた。

「野口刑事をお願いします」

里美のことは署内でも知られていた。

「ちよっと待ってね」

なれた声が聞こえた。電話の後ろでは、皆がはやし立てる声が聞こえていた。

『野口、姫様からだぞ』

『結婚の相談か』

『うるさい、黙れ』 はははは・・・ いつもこんな具合だ。

「はい、野口であります」

電話の出かたもいつもと同じだ。

「いつ暇取れる？頼みがあるの」

「明日は非番であります」

「じゃあ、明日自宅に行くわ」

「分かりました」

野口は電話が嫌いだった。顔が見えないから緊張するのである。

それが里美だともっと緊張するのだ。元来照れ屋なのだ。里美もそのことを知っていた。

だから二人の電話はいつも直ぐに終わるのだ。非番といっても緊急時には呼び出される。

所在を明らかにしておくか、ポケットベルを持ち歩く規則になっていた。

しかも勤務は朝七時まで、交代の署員が来て、初めて休みとなるのだ。

どんなに早く帰っても八時で、寝るのは九時過ぎる。

しかし、里美はしっかりとわきまえていた。来るのはいつも夕方だった。

野口は安心して高いびきで寝ていた。

ところが、里美は昼には玄関をノックした。眠い目をこすり里美を迎え入れたが、

その表情からただ事ではないと読み取った。

「何かあったみたいだね」

「あなた方警察にも関係することよ」

部屋に上がるなり里美は今までの状況を細かく説明した。

「すると、里美さんの親友だった弘子さんと、皆、関係あるわけだね」

野口は決して呼び捨てにはしなかった。

「死んだ弘子が手を下しているとは思えないけど、関係があるのは確かよ。」

発見状態も似ているし、同一犯の可能性はあるでしょ？」

「確かに言えるね。ただ、僕は雄二さんの事件を知らない。調べてみないと何ともいえないね」

「それが私の頼みなの。雄二の事件を調べてほしいの」

二人は軽い食事を済ませ、休日返上で調べることにした。

もしも里美の言うとおりで、繋がりが出てきたら、上司に報告するつもりだった。

雄二の事件は三年以上前の事件だ。

しかし事件は都内で起こり、警視庁の管轄には違いなかった。

雄二事件の管轄署でも昨日のニュースと結びつける刑事がいた。

当時、雄二の事件を担当していて、今回の事件が似ているように思っていたのだ。

しかし、接点が見つからずに困っていた。

同じ美大に通ってはいたが、それだけでは、捜査は進展しない。

そこに、野口と里美が訪れたのだ。

里美の話を聞くと興味を示し、快く協力を申し出てくれた。

この榊という刑事は、現場の酷似点に注目していた。

雄二の調査書類を持ち込み、今回の事件の報告書を、至急送るよう連絡を取った。

報告書は、十分足らずでファックスされてきた。類似点は多く見られた。

どちらも体に残された水分量が似ているのだ。早く言えば、ミイラの状態が似ているのだ。

そして、報道はされていないが、どちらも性交渉の痕跡が残っていること。

しかも、一度ではなく、なんども交渉があった事。

雄二の場合は、布団と恋人との身体から残された精液の量から、最低でも十回の性交渉はあったと報告書には書かれていた。

今回の事件でも、かなり大量の女性特有の分泌液が布団に残されていたようだ。

また、ミイラ化に近い状態だったにも関わらず、雄二は三日前に仕



事をしていたのだ。

その就業時の雄二の状態は、普段と変わらなかったらしい。  
それがたった三日でミイラ化したのだ。

報告書の内容に野口も驚きを隠せなかった。

## 2章（1）

里美も同様に報告書を見て驚いた。

「たった三日ですか」

「私が当時聞きこみに回ったから確かです。現場では何人も元気な雄二を見ていました。」

ところが翌日欠勤したのです。しかしその日は土曜日で、監督もそれほど気にしなかったようです」

「あの事件では、同棲相手が犯人とニュースで見ましたが、本当ですか？」

と、里美は尋ねた。

「まず間違いないと思います。被害者の首に、女の手の形がくつきりと残っていました」

榊の答えに、野口が尋ねた。

「ミイラ化しても手形ははっきりと残っていたのですか？」

野口は殺人課でも、優秀な刑事だった。かなり奇妙な遺体とも遭遇し、

古い遺体を何度も見たりしていたのだ。

「それも不思議ですが、首の周りはミイラ化してなかったのです」

「それでその女性の死も、普通ではなかった訳ですか？」

「そうです。遺体発見時、その女性は全裸で遺体に寄り添い、寝ていました。」

ぐっすりと眠っていたのです。夢でも見るかのように。しかし、警官が女性を起こすと半狂乱となり、警察病院に収容したのです。これがその時の報告書ですが・・・」

そして榊は野口に別の書類を手渡した。

「そこに書いてあるように、女性は一切覚えていないようでした。日にちの感覚さえ無かったようです。ところが、数時間後、眠るように息を引き

取ったのです。身体的には疲労は残っていたものの、ほかに異常はなかったのです。

脳に損傷もないのです。仮に精神に異常があつたとしても、健康な人間がただ横になり、

何もせずに死ぬことなど、不可能に近いことです」

榊の説明に野口は頷いた。仮に息を止めたとしても、生存本能のため死に至ることは

出来ない。薬も飲まず、自分を傷つけもせずに、死ねるものだろうかと考えた。

答えはノーだ。

やはり、外的要素がない限り、人間は意志のみで死ぬことなど不可能だった。

「唯一つ、この女性もかなりの性交渉があつたようです。男の精液と一緒に分泌物が発見されました」

報告書を見る野口は、不思議に思った。

同棲相手である二人が、ことに及んでいたのは間違いがないらしいが、男はミイラで女は健康、と言うのが信じられなかった。その違いはどこから来るのか。

確かに男は放出するが、女でもシートがぐつしよりとなるほど濡れるときがある。

かえって、女のほうが全体的に見たならば、水分の損失量は多くないそうに思えた。

しかし、男がミイラ化したのだ。どう考えても理解出来なかった。

「一応、女の証言を確認しました」

榊は新たな報告書の一部を野口に渡した。

「確かにその女性の言うように、二十五日にタクシー乗り場で、女性が倒れたそうです。

聞き込みで、その女性の後ろに並んでいた男を見つけました。男の証言では、

二十五日の深夜十二時半ごろのことですが、具合の悪そうな女性

がいて、気を失ったようですが、一緒にいた友達がどこかに連れて行ったようです。しかし、亡くなった女性の話では、

一人でタクシー待ちをしていたみたいで、友人の話はできませんでした。

しかし、その友人らしき人物は確かに名前まで呼んでいたそうです。男ははっきりとそう証言しました」

益々不思議な話だった。里美はあまり美奈子を知ってはいないが、何度か顔は見たことがあった。決して美人とはいえないが、スタイルがいいことは覚えていた。

その美奈子の死に様、雄二と今回の女の死に様。弘子の怨念を感じずにはいられなかった。

野口は怨念とか信じない。しかし、里美に言われてきたものの、ここまで類似点があると、上司に報告せざるを得なかった。実際二つの事件は、繋がっているのだ。

しかも動機まである。

誰かが弘子に成り代わり、復習していると考えられたのだ。

野口は早速上司に相談することにした。

里美とのデートはお預けだ。里美もそれ所ではなかったのだ。

野口の上司は、報告に幾分戸惑った。

しかし、野口の言うように、類似点の多さから、合同捜査本部を設立することを

約束してくれた。

ところが捜査本部は雄二の事件の管轄署と、今回の事件の管轄署に  
よるもので、

野口は蚊帳の外だった。

だが、野口の上司は出来た上司で、野口の特別参加を許したのだった。

野口は里美に早く知らせたかった。しかし里美の電話は通話中だった。

里美は美子と話していたのだ。

## 2章(2)

「それでね、実家に電話したけど、使われてないの。それで、実家のある役所に電話したの。」

「そしたらビックリよ」

「どうしたの？」

「何でも、弘子の死んだ後に、弘子のお父さんも後を追うように亡くなったらしいの。」

弘子は一人娘だったでしょ？だから継ぐ人がいなくて、お父さんの遺言どおりに、

全て寄付したそうなの。だから今では家はないのよ」

「じゃあ、弘子の持ち物もないわね」

「ないと思うわ。里美はどうだったの？」

里美は美子に今日の出来事を話した。

「やっぱり弘子かしら。説明つかないわ」

と、美子は里美に言った。

「野口刑事は誰かが、弘子の代わりに恨みを晴らしていると言っていたわ」

「そうとも、言えるけど、話を聞くと、とても人間技とは思えない」  
たった三日で人間をミイラにする。美子には理解出来なかった。里美も美子の考えを、

否定するだけの言葉も知識も持っていなかった。黙り込む二人は、必死に次の言葉を探した。

「今度は、弘子のアパートを見てみるわ」

口を開いたのは、美子のほうが早かった。

「うん、気をつけてね」

里美はなぜそんなことを言ったか分からなかった。

「大丈夫。じゃあ、また連絡するね」

美子はそう言って受話器を置いた。里美の言葉はなんとなく理解で

きた。

里美も弘子の存在をうすうす感じているのだろつ。美子にはそう思えた。

何故ならば、美子には弘子の仕業としか思えなかったからだ。

しかも、実家がなくなつた以上、弘子が留まるとしたならば、あの、アパートしかないのだ。

美子は怖がりなくせ、幽霊話とかが好きだった。死後の世界を信じていたのだ。

肉体が滅んでも、魂は生き続けると思っていたのだ。ただ、美子には特別な靈感などはない。

しかし、恐怖は少しも感じなかった。相手は弘子だ。

たとえ幽霊になつていても、相手は弘子なのだ。自分に危害を加えることは、

絶対無いと思っていた。そう思いたかつたのかも知れない。

## 2章(3)

美子はベッドに寝転び、明日の欠勤理由を考えていた。

お父さんが死んだことにしようか、とも考えたが、それでは忌引き休暇になる。

それはやっぱり気が引けた。学生時代も含めたら、美子の父はすでに三度も死んでいた。

さすがに四度目となれば、お父さんもかわいそうに思えたのだ。

下手をして、会社がお悔やみ電報でも送ったら、それこそ大変なことになる。

無難なところで、おじさんにしようと美子は決めた。おじさんならば、まだまだ腐るほど？

いるので、しばらくはする休みの理由に出来そうだと思った。

その為にも、今から準備する必要があった。

「もしもし、和代？私、美子」

「どうしたの？」

「実はさ、おじさんが死んで今から田舎に帰るのよ。明日、私からも会社に電話するけど、

何時に連絡できるか分からないの。一応、朝一番に、課長には伝えてくれないかしら？」

「大変ね。いいわよ。伝えておくわ。気をつけて行ってらっしゃい」

「ありがとう。おじさんの所、男所帯だから手伝わないと・・・じやあね」

受話器を置いて、美子はガッツポーズをとった。完璧だ。心底、そう思ったのだ。

電話の様子では、同僚は疑いは持っていないようだ。

これで課長も私が電話する前に、理由が分かり、詮索はしないはずだ。

これが、下準備も無しに、朝の忙しい時間に私が電話をしたら、



ほとんど疑りから入るだろう。そうなれば、その場の思いつきで、苦しい嘘をつかなくてはいけなくなるのだ。

これは美子の長年の経験から導き出したものだった。

美子は、普段あまり見ないテレビを、今日はスイッチを入れた。事件の続報がないかをみたかったのだ。

案の定、ニュースは怪奇事件で持ちきりだった。

しかし、新たな発見や進展はなく、討論会になっていた。

眉唾そうな心霊研究家や、犯罪心理学者、元警視庁の捜査員に大学病院の医師。

その人たちが大きなテーブルに座り、皆勝手に話していた。中でも美子を笑わせたのは、

心霊研究家の意見だった。死んだ女性には、焼死した男の霊がついていると言うのだ。

だから水をほしがり、被害者をミイラにしたと言い張っていたのだ。病院の医師は、どんな薬を使っても、こんな短時間でミイラにするのは不可能だと語っていた。

その意見には美子も賛成だった。しかし、元警視庁の捜査員は、真つ向からぶつかっていた。

これは、テロ犯罪であり、どこかの組織が開発した細菌が原因だと怒鳴っていた。

なぜ、この男が元なのか、美子には十分理解できたように思った。

「くだらない」

しばらく見ていたが、あまりにも馬鹿馬鹿しいので、美子はテレビのスイッチを切った。

ベッドに腰を下ろし、美子はため息をついた。

やがて、無意識のようにベッドの下に手を伸ばすと、一冊のアルバムを引き出した。アルバムの表紙には、うつすらと埃さえ積もっていた。

美大時代のアルバムだ。弘子の死後、見るのが辛くてベッドの下に

突っ込んだままだった。

美子はゆっくりと表紙の埃を手で掃った。一ページ目から弘子の笑顔の写真が目飛び込む。

三人で旅行に行ったときの写真だ。美子と一緒にお団子をほおばる弘子。

これは里美が撮った写真。里美と一緒に大仏の前でポーズする美子。この時弘子は写真を撮った後につまずき転んだのだ。

その写真は次のページにあった。ひざを擦りむき、大泣するまねをした弘子。

美子の目からその写真に涙が落ちた。

楽しかった思い出とともに、深い悲しみが美子を包んだ。

その時、不意に里美から電話がかかった。

「どうしたの、泣いているの？何かあったの？」

里美は美子の涙声に驚いた。

「何でもないわ。昔の写真を見ていただけよ」

「もう、ビックリさせないで、心臓が止まるかと思ったわ」

「ごめんね、でも弘子の写真を見ていたら、涙が止まらなくて……」

「泣き上戸の美子ね。でもあなたの気持ちは痛いほどわかるわ。」

私はいまだに写真を見られないの。やっぱり辛くて……」

「私も、今やっと見たのよ、でもまだ無理みたい。二ページ目これだもの」

「時間が解決してくれると、思いたいけど、そんな単純ではないわね」

「そうね、辛いわ」

しばらくの沈黙が二人の間に流れた。

「そうそう、聞いて、その為に電話したのに、美子が泣いているから忘れて、」

電話を切るところだったわ」

「なにかあったの？」

「警察が動くわ」

里美ははつきりと言いつつ放った。

「どう言つこと?」

「雄二の事件と、今回の事件と関連があると判断したの。合同捜査本部も設立するの」

「でも、警察では解決できないと思うけど……」

「美子の言いたいことは分かるわ。でもね、これだけは私も思うの、事件がもつと公になれば、弘子の苦痛も少しは和らぐかなって」

「それで弘子の復讐も終わればいいけど……。そうそう、私も報告があるのを忘れていたわ」

美子もすっかり忘れていた。

「なに?」

「明日、弘子のアパートへ行くの」

「どうやって?」

「部屋を借りる振りをしたのよ。そしたら、明日なら見せられるって」

「美子仕事は?」

「休みよ。ずるだけど」

「大丈夫なの?」

「もう手は打ったわ」

美子は自慢げにさっきの話をしたのだ。

「お調子者ね。じゃあ、何かあったら電話して、仕事中でも構わないから。ね」

「わかったわ、心配しないで、お姉さん」

二人はしばらく笑ってから電話を切った。

## 2章（4）

合同捜査本部は雄二事件の管轄署に設けられた。署も広く、大きな空き部屋があつたからだ。

野口が捜査本部に着いた時には、既に三十人ほどが集まっていたが、明らかに不満顔の刑事もいた。

今回の事件の管轄署の刑事達は、明らかに敵対心を持っているようだった。

野口が本庁からの応援と紹介されて、直ぐに一人の刑事が質問を浴びせた。

「何故、合同なのですか？」

「その説明も兼ねて私は来ました。その書類にもありますが、遺体に残された類似点。

これが非常に多いこと。そして共通の美大に通い、共通の人物に危害を加えたことです。

同一犯の可能性が高いと思われます」

「同一犯と仮定して、犯行理由はなんですか？」

「怨恨です」

そう言うと、野口はホワイトボードに向かった。そしてボードに丸く輪を書き、

A子と書き込んだ。

「今から四年近く前になりますが、同じ美大にこのA子がいました。そして、このA子を落としいれ、後輩にレイプさせようとしたのが、今回の被害者です。

そして、この時、A子を助け、のちに付き合うようになったのが、三年前の事件の被害者、

雄二君です。ところが、このA子は、更にその半年前に殺害されています。

結果は自殺扱いになりましたが、当初、容疑者は、この雄二君でし

た。

しかし、彼は無実で釈放されました。アリバイが、立証されたのです。

そのアリバイを証言したのが、雄二君事件で、容疑者となった女性です。

その女性も雄二君発見の数時間後に亡くなっています。この、ことからわかるように、

二つの事件、三人の被害者、ここではあえて被害者と言っておきますが、この三人は、

このA子と全て繋がっているのです」

「しかし、そのA子が既に亡くなっているのであれば、怨恨の線はないのでは？それに、

怨恨は今回の被害者だけに思えます」

「問題はそこです。このA子の自殺が、もし殺人だったら？もし雄二君だったら？

証言者が嘘の証言で雄二君を助けたとしたら？そうなれば一連の事件は、すべてA子のため。

ということになります。誰かが代わりに復習を行っていると考えるべきではないですか？」

野口はその場の皆を見回したが、帰ってくる眼差しは冷ややかだった。

「それでは、A子の事件が、他殺であったことを立証しなければ、その推測自体に意味がないのでは？これが立証されれば貴方の意見を尊重しますよ」

皆もこの意見に賛成のようだった。大きく頷く者もあり、『そうだ』という者もいた。

ただ一人、榊だけは真剣に野口の話聞いていた。

同じ警視庁でも、管轄の違いによる隔たりは大きかった。結局は合同とは言いながらも、

弘子の事件が雄二による犯行と断定されるまで、それぞれの事件に

従事する事と決まった。

弘子事件は野口一人で立証しなければならなかった。会議が終了し、出席した刑事達はそれぞれ自分の管轄に戻っていたが、その集団を見送り、

野口は頭を抱えた。自殺との最終決定を、他殺に覆す。並大抵では出来ない。

弘子事件の担当刑事、担当検事の反発を買うのは容易に想像できた。協力を拒まれても仕方ないことだった。それでも野口はやるしかないと思っていた。

そこに榊が現れ、自分も協力すると言ってくれたのだ。

心強い味方が現れたが、簡単に捜査が進むとは思わなかった。

案の定、翌日に訪れた弘子事件の検事は、自分の判決に不服があるのか、と言いたげに、

露骨にそっけない態度をとった。

「もう一度、調べたいと言うなら、止めはしませんがね、当時の容疑者も死んでいるなら、

立証は無理だと思うが……」

検事は面倒そうに答えた。

野口は日本の司法のあり方に、疑問を持たずにいらなかった。

担当署の刑事は、野口の予想を反して至極まともだった。

殺人と立証できず、雄二を起訴できなかったことに、不満を持つ刑事がいたのだ。

取調べのとき、逆に雄二から攻撃を受けた刑事だった。

「あいつの態度は普通の学生態度ではなかった。普通、殺人の嫌疑がかけられただけでも、怯えるのが当たり前です」

さも、口惜しそうに答え、出来ることは協力すると約束してくれた。ところがその刑事の上司はいい顔をしなかった。

『ただでさえ忙しいのに、またぶり返すのか？人員を割くことは出来ない』

その答えに野口は動揺しなかった。上司の反応は野口の予想通りだったからだ。

しかし、どうにか二人の協力者を得て、野口の捜査は始まった。

### 3章（1）

美子は、朝早くに家を出た。会社に休みの連絡を入れるのに、自宅からではおかしい。

そう思ったのだ。しかも、会社の電話には、発信者表示機能がそなわっており、

一発で嘘がばれるからだ。

美子の自宅番号が表示されているにも関わらず、いま、おじの家です。

などとはいえない。その点、公衆電話からでは、番号表示がなされない。

どこかの公衆電話からかける必要があったのだ。

どこから掛けようかと思ひながら、美子の足は、自然と地下鉄駅へと向かっていった。

美大時代に通った道だ。今では通勤もJRに変わり、しばらくこの道も通ってはいなかった。

都内にしては静かな住宅地で、緑に溢れていた。初夏の日差しがまぶしい。

朝といってもかなり気温は高そうだった。白いワンピースがまぶしく光る。

かなり古いワンピースだが、美子は特に気に入っていた。

亡くなった祖母からのプレゼントで、夏の間はよく着ていたのだ。

『弘子にも貸したことがあったわね』ふと、弘子が着たときの姿を思い出した。

美人な弘子にも、白いワンピースは良く似合っていた。

「弘子・・・」

美子が呟いたとき、一陣の風が美子を取り巻いた。

一瞬の出来事で、風が収まると、あたりには穏やかな日差しが戻っていた。



気がつく、緑の生い茂る公園の入り口に、公衆電話がたたずんでいた。

静かだし、ここならば会社に連絡を入れるのに丁度良く思えた。美子が近づくと、塗装のはげた古そうな公衆電話で、傷だらけだった。

「そう言えば、こんなところにあつたかしら」

美子は呟き思い出そうとしたが、公衆電話の記憶は、毎日通った道にも関わらず、

頭の記憶層からは見つけれなかった。

設置したばかりかも、と思い美子は受話器を持ち上げた。

古い公衆電話の持ち回りかと思ったのだ。

会社と、不動産屋に連絡するつもりだった。

しかし、コインを入れても、発信音は聞こえてこない。

フックを押し下げ、もう一度コインを入れた。やっぱり何も聞こえてはこない。

故障中かなと、思った美子の耳に、かすかに何かが聞こえてきた。

「・・・子、美子」

それは徐々に大きくなり、自分の名を呼んでいた。

「・・・子、美子、お願い、来ないで」

紛れもなく弘子の声だった。

「弘子！弘子！」

美子は叫んだ。しかし、もう何も聞こえなかった。むなしい静寂だけが受話器から流れた。

美子は受話器を握ったまま呆然と立ち尽くしていた。

やがて人の気配を感じ振り向くと、年配の女性が立っていた。

「電話、もういいのかしら？」

電話待ちだった。

「は、はい、どうぞ」

美子は慌てて受話器をフックにかけ、電話から離れた。

美子は、弘子の言葉を思い出していた。

『来ないで』 その声は確かにそう言っていた。そこで美子は気がついた。

来ないでということは、やっぱり弘子はおそこにいるのだと……。年配の女性はコインを入れ番号を押していた。

「あ、それ、故障・・・」

美子が言い終える前に、年配の女性は、話を始めていた。美子は電話から少し離れた。

使えるのならば、里美に知らせたかったのだ。弘子がまだアパートにいることを……。

年配の女性は、孫に会いに行くところらしい。お土産は何がいい、と頻りに聞いていた。

その時、またも一陣の風が美子を取り巻いた。

先ほどよりも激しい風は、多くの砂埃を巻き上げた。

美子は強く目を瞑り、急いで風に背を向けた。

その風は先ほど同様、直ぐに収まったが、振り向いた美子は目を疑った。

公衆電話も、話中だった年配の女性も、忽然と消えていたのだ。

そこには、見慣れた公園の入り口があるだけだった。美子は慌てて地下鉄駅へと駆け出した。

里美に連絡しなくては。ただそれだけが頭にあった。

### 3章（2）

里美は最後の口紅をひいた所だった。出勤まで後五分。特別急ぐ必要はなかった。

朝の日差しが窓から差し込む。

「暑くなりそうね」

里美は上着を着るか、手に持つかで悩んでいた。突然の電話にも里美は驚かない。

仕事柄、良くあることだった。出勤前の原稿の受け取りも、今まで何度もあったのだ。

「原稿ですか？」

里美は電話に出るなり、そう答えた。しかし、相手は何も言わない。激しい息使いが聞こえるだけだ。

「美子？美子なの？」

里美にはピンときた。

「・・・そう、・・・そうよ」

電話口の美子の声は駅まで走ったため、息切れしていた。

「どうしたの、何かあったの」

「で、電話では・・・電話では言えないわ」

「わかった。今から行くから、どこなの？」

美子から場所を聞き、里美はバッグを掴むと慌てて家を出た。

着るか、手に持つか悩んだ上着は、結局、椅子にかけられたままだった。

改札近くの壁にもたれる美子は、通勤客の視線を集めていた。

OLらしき女性は、不快感を露にして通り過ぎた。仕方なかった。

美子の顔は汗と涙で汚れていた。

化粧も半分は流され、髪も衣服も乱れ、とても見られた姿ではなかった。

しかし朝の通勤時刻に、優しい言葉をかける人はいない。

皆、足早に通り過ぎるだけだった。

美子にしてみれば、そのほうが気は楽だ。注目を集めるのは仕方ない。

『どうしたの？ なにかあったの？』と根掘り葉掘り聞かれるのも嫌だった。

じつと里美の来るのを待つだけでも、今の美子には辛かったのだ。弘子の声を聞いたのは嬉しかった。恐怖は微塵も感じない。

しかし冷静になって今思えば、弘子は拒んだのだ。

美子の訪問を、その声ははっきりと拒んだのだった。辛すぎた。

美子の胸は張り裂けそうだった。

里美は美子を見つけると、しっかりと抱きしめた。美子は里美の胸で思いつきり泣いた。

通勤時間にも関わらず、二人の周りには、人を寄せ付けない不思議な空間が広がっていた。

二人は、人目を避けるように、暗いボックス席に座っていた。

マスコミ関係者が使う昼まで営業するスナックだった。俗に言うオカマバーである。

普通、女はオカマに嫌われる。オカマは女に嫉妬するのだ。

どんなに頑張っても子供は生めない。それが理由らしい。

しかし、里美は姉御肌、性格も女々しくなくサッパリとしている。

何度が連れられて来る内に、すっかり仲良くなったのだ。

里美が美子を連れてきたとき、ママはこう言った。

「女が、女を泣かしては駄目よ。もしかして、おなべだったの」と。

里美が睨むと、ママは黙って奥のボックスを用意してくれた。

尋常ではないと、気がついたのだ。こんな時は、気配りのつくオカマのほうが安心できる。

里美はそう思っただけで来た。

カウンターでは業界人らしき数人が、かなり酔って歌っていた。

しかし、誰も里美に声をかけない。

この手の店では、他人のプライバシーには立ち入らない。そんな風潮が出来上がっていた。

もちろん、楽しむときは店が一丸となって楽しむ。

それがこの手の店の良いところでもあった。

カラオケの歌が少々騒がしいが、人に聞かせる話でもない。かえって都合がよかった。

タクシーの中でも黙り続けていた美子は、腰を下ろすとようやくゆっくりと話し始めた。

里美は驚かなかった。

何故かは分からないが、弘子の性格を知り尽くす里美には、当たり前にも思えたのだ。

「きつと、私たちを巻き込みたくないのよ」

里美の言葉に美子は頷いた。もう涙は流していない。

その時、ママが水割りを持ってボックスに現れた。

「深刻な話？良かったらおばさんにも聞かせて？年配には年配の知恵があるのよ」

と、里美の隣に腰を下ろした。里美は頷き、大まかにだが今までのことをママに話した。

しばらく考え込んでいたママは、不意に立ち上がり、振り向きざまにカウンターのお客に叫んだ。

「今日は店じまいよ。ごめんね。また来てね」

お客は文句も言わずに帰っていった。慣れたものだ。

「あんたたちも、こっち来て」

片づけをするバイトをママは呼んだ。二人もれっきとした？オカマだ。

「ちょっと聞いて」

ママはバイトの二人にも話をした。バイトの一人は、靈感が強い。そんなことを聞いたことがあった。

オカマバーではよく心霊話に花が咲く。里美が来たときも、よく怪

談話をしていた。

里美が怖がらないと知って、バイトの子はがっかりしていたのだ。彼？は良く幽霊を見るらしい。

子供の頃から見えたようで、今では慣れっこになっていた。

子供の頃には、幽霊と人間、両者の区別がつかず、恐怖心は少しもなかったそうだ。

彼？の説明では、弘子は既に悪霊となっているらしく、

変わり果てた自分を見せたくないのでは、と言う事だった。

里美にはなんとなく理解できたが、美子は納得できない様子だった。どんな姿でも、もう一度会いたい。それが美子の願いだった。

しかし、当の弘子が拒む以上、姿を現さないのでは、とも、その彼？は言っていた。

それでも美子の気持ちは決まっていた。とにかくアパートに行くことを諦めなかった。

里美も一緒に行くことにした。何が起ころうとも、美子一人にはできなかったのだ。

ママもその彼？ノンちゃんも同行させたらと、言ってくれた。

ノンちゃんは喜んで付いて来てくれるらしい。

「なんか、わくわく、って感じ」

里美はバッグを美子に渡した。そして小さく笑って一言加えた。

「化粧を直しなさい」と。

### 3章(3)

野口と榊は弘子の殺害場所であるアパートに向かっていた。現場を見ておきたかったのだ。

アパートの大家には、連絡を入れてある。鍵を持って前で待っているはずだった。

大家は不機嫌に鍵を渡すと、さっさいなくなった。

また騒ぎ立てるのか、と言わんばかりに。野口はアパートの周りを、ぐるりと一回りした。

そして、殺害現場となった弘子の部屋の下で立ち止まり、窓を見上げた。

壁に取り付く蔦を持ち、野口はゆすつてみた。

「これならば登れそうですね」

榊が言った。

「当時もこれと同じくらいなら、登れるな」

四年でどの程度、蔦が伸びたか分からない。だが、若い雄二には簡単なことだろうと思った。

野口は玄関に向かい歩き始めた。榊も黙って後を追う。

壁の所々からはいくつかの彫刻が顔を覗かせていた。

玄関の両脇には、立派な石柱も立っている。

「由緒ある建物みたいですね」

榊は石柱を見上げた。

「昔は、イギリスかどこかの軍人宿舎だったそうだ」

野口はあらかじめ調べたのだ。当時は軍人といっても戦争目的ではなく、

旅の護衛を兼ねての同行だった。役人や商人が仕事中に、護衛の

軍人が寝泊りする宿舎だったらしい。

「どうりで」

榊は感心したようだった。玄関ホールを抜けると、小さいが綺麗な

中庭が広がっていた。

その中庭を囲む様に建物は作られていた。まるで砦のような造りだ。玄関ホールと、丁度その向かいに階段が作られており、共に三階まで続いていた。

各階の廊下は、中庭側でつながり一周出来るようだった。

全体的に見れば長方形の形をしており、長いほうの面に四部屋。

玄関ホールと向かいの面に、階段を挟んで一部屋ずつ配置されていた。各階十二部屋だ。

「お洒落な作りですね。結構家賃も高そうですね」  
榊の質問に野口は答えた。

「被害者の実家は、かなりの資産家で、問題はなかっただろう」

野口はそう答えたが、実は今では安いことを知っていた。

事件があったときから、徐々に賃料は下げられていたのだ。

その理由は、気の良さそうな不動産屋から聞いていた。

気の良さそうなその親父も、幽霊話を半信半疑だったが、否定はしなかった。

確かにこの空間には、一種独特の雰囲気があった。

しかしその雰囲気は、この作りと古さから来るものだ、野口は思った。

現場は玄関ホールから見て右手の奥になる。階段の隣で、左右には部屋はない。

少々騒いでも周りには聞こえないようだと思った。各部屋の扉は鋼鉄製。

頑丈そうな作りだった。二人は玄関ホールの階段を上った。

外廊下に出たとき、僅かに重苦しい雰囲気を感じた。榊も何かを感じたようだ。

「嫌な感じがしますね」

野口は答えなかった。現場のドアは正面に見える。

しかし、ドアに向けて歩きだしても、ドアはどんどん遠ざかっていった。



いや、そう見えたのだ。野口は見に見えない何かを感じ取った。しかもその感じは、ドアに近づくにつれ、はつきりと野口を押しつぶし始めた。

榊はとうとう立ち止まった。苦しそうに胸を押さえ、その場に座り込んでいた。

野口は必死に一步を踏み出し、ドアに手をかけた。その途端、何者かに野口は吹き飛ばされ、

座り込む榊とぶつかった。訳が分からずドアを見上げる二人の目に、黒い霧が徐々に現れるのが見えた。

その霧は更に大きさを増して、廊下に座り込む二人を包み込もうとしていた。

胸の苦しきで動くこともできない二人は、その霧をただ睨みつけるしかなかった。

しかし、突然その霧は消滅し、重苦しい雰囲気も辺りから一瞬で消え去った。

二階の廊下には、里美たちがいた。同行していた不動産屋の気のいい親父は、

一目散に逃げ出した。

里美も美子も今の出来事が、信じられないように、呆然と立ち尽くしていたが、

ノンちゃんには、しっかりとその正体が見えたらしい。

「今のが、二人のお友達よ。でも悪霊ね」

そう言くと、座り込む刑事二人に駆け寄った。

「貴方たち大丈夫？」

そう言つて手を差し伸べ、榊を見た目が変わった。

「あら、いい男」

榊は差し出した手を、急いで引つ込めた。

「失礼しちゃうわ。ふん」

ノンちゃんは野口に手を貸した。そして、五人は坂の下の商店街に戻ってきた。

さすがに、あのままあの部屋には入れなかったし、ノンちゃんもやめたほうがいいと、

言ったからだ。一行は小さな喫茶店に入り、小声で話し始めた。

「そうだったのですか」

野口は里美から話を聞き、頷き答えた。そして思い出したように榊を紹介した。

ノンちゃんは興味津津榊を見ていた。

「それで、これからどうしますか？」

野口に聞かれて里美は困った。里美は美子を見たが、美子も困惑の表情を浮かべていた。

「ちよっと、ノンちゃん、考えてよ。専門家でしょ」

「専門家って言っても、ちよっと詳しいだけよ。私だって分からないわ」

ノンちゃんは怒った振りをしたが、やがてまじめな顔で話し出した。「でも、これだけは言えるわ。近寄っては駄目よ。とても邪悪な存在だわ。」

普通の人間では太刀打ちできない。既に三人も殺しているならば、霊力もかなり強いと思うわ」

野口も榊もその手の話は信じていなかったが、今日の体験はとても人為的には思えなかった。

確かに目に見えぬ何かを感じたのだ。それは、恐怖であり、怒りであり、

そして哀れみだった。黒い霧に包まれそうになったとき、野口はそのすべてを感じたのだ。

野口もノンちゃんの意見に賛成だった。里美を危険な目には遭わせられない。

その想いが一番強かった。その時美子が口を開いた。

「でも、弘子が安らかでない事は分かったわ。里美、このままでいいの？」

このまま永遠に弘子は苦しみ続けるの？」

里美は答えられなかった。

美子の気持ちは十二分に理解できるが、いったい私たちに何が出来るか、

おそらく何も出来ないのでは、と思ったのだ。

「私の知り合いに霊能力者がいるの、紹介するわ。このままだと、更なる犠牲者が出そう」

そう言つて、ノンちゃんは霊能力者の連絡先を、メモにしたためた。野口も榊も何も言えなかった。

『馬鹿なこといつて』今まではそう言つただろう。

しかし今日の体験は、二人の考えを大きく覆す出来事になった。

しかも、『更なる犠牲者』の言葉が耳から離れず、藁にもすがる気持ちで、

霊能力者の協力を求めるしかなかった。

「ありがとう」

里美も美子もノンちゃんにお礼を言った。野口も黙つて頭を下げた。

「いいのよ、私からも連絡入れとくけど、絶対に無理はしないで、約束よ」

そう言つてノンちゃんは立ち上がり、

「私の役目はここまでよ。仕事しなくちゃ」

と喫茶店を出て行つた。野口は榊も帰らせた。それほどまでにショックを受けているようだ。

今も一言も口を聞かなかったのだ。野口の運転する車に、里美と美子は乗り込んだ。

もちろん警察の車で、ナビやら無線やらパソコンの末端まで装備された特別車両だ。

野口はエンジンをかけると、無線のスイッチを切つた。車内は静まり返つたが、

結局は、その霊能者の家に着くまで、誰も口を開かなかった。



### 3章（4）

「お待ちしていました」地味な感じの老婦人が、訪れた三人を快く出迎えた。

嫌味な気取った感じは一切受けない。テレビで見る霊能力者とは大違いだ。

ノンちゃんは連絡を入れてくれたらしい。

家は至って普通の作りで、表札には、酒田だけとしか書かれていなかった。

しかし、通された一部屋だけは趣が一転していた。

その部屋には、多くの燭台に蝋燭がとまり、

祭壇らしき台が置かれ、呪文のような言葉が壁一面に書かれていた。中央のスペースに座布団が敷かれていた。

老婦人は座布団に座るよう促し、自分も三人と向き合うように腰を下ろした。

「酒田です。大体の話は聞いております。しかし、もっと詳しく聞かせてください」

そう言つて目と閉じた。美子と里美はそれぞれ自分の身に起こった事など、

出来る限り詳しく話した。野口も事件の全容を分かる限り詳しく話した。

その間、酒田と名乗る女性は、何か念仏でも唱えるように呟き続けた。

話が終わると酒田は目を開いた。

「警察まで来るとは、相当な相手みたいね」

そして話を続けた。

「友達は悪霊になっています。でも、あなた方を決して忘れているわけではありません。

今でも友達と思っています。しかし、恨みが強いのも事実です。

裏切られ、夢を奪われ殺されれば、いたしかない事です。

今のところ彼女は一人で居ますが、このままに捨て置けば、更なる悪霊を呼び寄せてしまいます。力も強くなり、成仏させることも困難になるでしょう。

今しかありません。しかも、あなた方の協力がなければ、出来ません。

二人にその覚悟がありますか？」

酒田は美子と里美をじっと見た。

「はい」

里美は答えた。

「はい」

美子も答えた。

しかも美子は嬉しそうだった。酒田が言った、『今でも友達』の言葉が嬉しかったようだ。

しかし、野口は躊躇した。

「危険は無いのですか？」

「全然ないとは、言い切れませんが、チャンスは今しかありません。相手が二人を友達と思っている以上、二人には害を及ぼさないはずです。」

しかし、完全に邪悪な心に支配されれば、そんな気持ちはなくなるでしょう。

だから今しかないので。なぜならば、あなた方二人からは、邪悪な気配は感じられません。

ただ……」

酒田は野口を見た。

「あなたは狙われています。邪魔をする人間だと思われたようです。邪悪な気配が包み込んでいますよ」

野口は慌てた。そう言えば寒気を感じていたのだ。

この部屋の雰囲気だと、ばかり思っていたのだが。

「安心なさい。それは簡単に取り除けるわ。霊の本体はそのアパー

トにいるから」

酒田が一言喝を入れると、嘘のように寒気は収まった。

「もしも他の悪霊を呼び寄せてしまったら、こうは簡単にはいかないわ。」

明日は私もそのアパートに行きます」

それから、里美と美子を見て酒田は言った。

「何か思い出になるようなものがあつたら、持ってきてちょうだい」  
里美と美子が頷くと、野口に向き直り、こう言った。

「あなたはアパートに入って駄目よ。相手はあなたを知り尽くしたわ。」

今度捕まったら逃れられない」

野口は思わず息を呑んだ。先ほどの寒気とは比べものにならない悪寒が、野口を包み込んだ。

その夜、美子は夢を見た。三人で大仏を見に行ったときの夢だった。

弘子と里美が大仏前でポーズを取り、美子がカメラを構えていた。ところがシャッターが切れない。

「ねえ、このカメラおかしいよ」

そう言うとき里美が走り寄ってきた。里美がカメラを覗き、弘子に向けシャッターを切った。

「大丈夫じゃない」

里美はカメラを美子に渡すと、弘子の隣へ駆けていった。

美子はカメラを覗きシャッターを切ろうとしたが、やっぱり駄目だ。  
「やっぱりおかしいよ」

里美は呆れたようだったが、今度は弘子が走ってきた。

ところが、美子に向かい走る弘子は、どんどん遠く離れていくのだ。必死に弘子を呼んだが、とうとう弘子は見えなくなった。里美は不思議と気がつかない。

そこで美子は目が覚めた。

その頃、里美も夢を見ていた。必死に弘子の名を呼ぶが、弘子の姿は消えていった。

美子は気が付かない様子で、大仏前で無邪気にポーズを取っていた。そこで里美も目を覚ました。



## 4章（1）

翌日美子は、写真を持って家を出た。昨日とは違いちょっと寒いぐらいだ。

日差しはほとんど射していない。野口がそろそろ、迎えに来る予定時間だった。

美子が表通りまで出てみると、既に野口の車は止まって美子を待っていた。

美子が近づくと、野口が降りて、ドアを開けてくれた。里美も後部座席で待っていた。

「おはよう。眠れた？」

里美に聞かれて、美子は首を振った。

「そう、私も眠れなかったわ、一度は眠りについたけど、夢で起きたの」

「夢で？どんな夢だったの」

里美に振り向き美子は尋ねた。夢など誰でも見るもの、それほど気になった訳ではないが、

会話が切れそうな気がして尋ねた。

「それが、変な夢だったわ」

里美は思い出すようにゆっくりと昨夜見た夢を話し始めた。

「え？私も、私も同じ夢を見たわ！」

二人は、話し合った夢の内容に驚いた。同じ時刻にほとんど同じ夢を見ていたのだ。

しかも、里美まで大仏を見に行ったときの写真を持ってきていた。通行人に頼んで撮ってもらった、唯一、三人で写っている写真だった。

野口も運転しながら驚いていた。酒田の家に着くと、酒田もすでに玄関先で待っていた。

酒田が助手席に乗り込むと、美子は夢の話を酒田に聞いてみた。

「どういうことかしら」

酒田は写真を一枚受け取り、目を閉じた。

「会いたいけど、会いたくない。そんなところかしら」

酒田はそれ以上言わなかった。その後、酒田は念仏を唱え始めた。美子と里美は黙って座っていた。

商店街を通り抜け、坂を上り始めたところで、急に酒田の念仏が止まった。

「ここでいいわ。相手は貴方に気がついた。危険だわ。これ以上近づかないで」

酒田は野口を見た。その表情には険しさが伺えた。

野口はその表情から、恐怖さえ感じ額から流れる汗さえ感じた。

そして路肩に車を止め、三人を下ろすと、ゆっくりとUターンして坂を下り始めた。

野口は振り返り里美を見たが、悲しそうな目だった。

そして野口の口が『きをつけて』と、動いた時に、酒田が急に大声で叫んだ。

「止まって」

その時酒田には、助手席に座る弘子の霊が見えたのだ。

その顔は不気味に笑い、その視線は野口を飛び越え酒田に向けられた。鋭い眼光を光らせて『お前には助けられない』そんな言葉が酒田の頭に響いた。

しかし、野口には酒田の叫びは聞こえなかった。バックミラーに映る里美を見ていたのだ。

そして、バックミラーから前方に視線を移した時、脇から現れたトラックの横腹に、

野口の車はそのまま突っ込んだ。野口は即死だった。

丁度、前輪と後輪の間に突っ込み、荷台の下まで入り込んでしまったのだ。

そしてフロントガラスごと車の上部が、後ろに飛ばされ、車の中には、

野口の下半身だけが無残に残された。

榊が署に来た時、里美は気が狂いそうなほど泣いていた。

美子は里美を抱きしめるだけで、精一杯だった。酒田は念仏を繰り返し、恐怖に震えていた。

「何があつたのですか」

榊は近くの警官に尋ねた。警官は榊の手帳を見て、敬礼してから答えた。

「野口刑事が亡くなりました。トラックに突っ込んだのです。」

三人は、その直前までその車に同乗しており、一部始終を見ていました。

しかし事情を聞こうにも、榊刑事を呼んでほしいとしか言わないのです」

「どこか部屋は空いていますか」

榊は尋ねた。

「用意します」

警官はそう言って、その場を離れた。榊はじっと三人を見つめていた。

しばらくして、さっきの警官が戻り、空き部屋に皆を案内してくれた。

部屋にはいると、榊は鍵をかけた。邪魔されたくない。そう思ったのだ。

それよりも、誰が聞いても信じないと考えたのだ。里美は部屋の長椅子に寝かされた。

少しは落ち着いたようだが、時折、背中を向けたまま鼻をすすっていた。

榊が椅子に座ると、美子と見慣れぬ婦人が腰を下ろした。

「そちらは？」

榊の問いに、美子が答えた。

「霊能力者の酒田さん」

「榊です」

酒田に挨拶したが、酒田は念仏をやめなかった。そしていきなり

「恐ろしい、恐ろしい」

とわめきだした。やがて榊の手をとると、

「貴方も狙われる」

と言い、そのまま気を失い、テーブルにうつ伏せた。

榊には、意味が分からなかったが、美子が静かに話し始めた。

「昨日、榊さんも、黒い霧に襲われましたね。その時、悪霊に取り憑かれたそうです」

美子はため息をついて、話を続けた。

「今日は酒田さんもアパートが見たいということで、四人で向かいましました。」

しかし、野口さんは狙われると言うので、アパートには近づかない予定でした。

坂の途中で私たちを降ろし、野口さんはUターンしたのです。しかし、遅すぎたようです。

私たちには見えませんでした。酒田さんは、助手席に座る弘子の霊を見たそうです。

急いで止まるよう叫びましたが、野口さんには聞こえませんでした。そしてそのまま、トラックに衝突したのです」

その時、ドアがノックされた。絶妙なタイミングで榊は一瞬驚いたが、

直ぐに気を取り直し部屋のロックを外した。

「事故の詳細です」

警官は持ってきた書類を渡すと、黙って部屋を出て行った。榊は書類を見て驚いた。

上半身をなくした野口の足は、救急車が到着したときもまだ動いていたそうだ。

通報から到着まで、その間十五分。信じられなかった。

その事実もさることながら、昨日まで話をしていた野口刑事が、こ

こまで、

無残な死に方をするとは、想像も出来なかった。

榊が書類から目を上げたとき、酒田は意識を取り戻し立ち上がった。

いつの間にか美子は里美に寄り添い、二人は長椅子で眠りについていた。

しかし、酒田の様子がおかしい。

歩いてもないのに、なぜか近づいてくるように見えるのだ。

いや、近づいていた。その上、顔も酒田の顔ではなくなっていたのだ。

その顔は夜叉そのものだった。榊は叫んだ。声も張り裂けんばかりに叫んだのだ。

しかし、里美も美子も起きようとしなかった。慌てて振り向きドアを開けようとしたが、

しつかりとロックがかかり、びくともしなかった。夜叉は空中を滑るように榊に近づいた。

思わず榊は銃を発砲した。しかし榊の発砲した銃弾は、夜叉を通り抜け、

古びた壁に穴を開けるだけだった。続けて三発発砲したが、無駄だった。

しかし、それが幸をそうした。

警官が数人なだれ込んできたのだ。銃声に驚いたらしい。

しかし、警官たちが目にしたものは、更なる驚きを与えたようだ。

逃げ惑う警官と一緒に、榊も部屋から飛び出した。

夜叉は必要に榊を追い続けた。二人の警官が夜叉の前に飛び出した。拳銃を構え夜叉に狙いを定めた。

「止まれ！止まらなと撃つぞ！」

「無駄だ！逃げろ！」

榊は叫んだ。しかし、二人の警官は発砲を始めた。確かに、銃弾は夜叉に命中した。

ところが銃弾は夜叉の身体を無情にすり抜けるだけだった。夜叉は二人を睨んだ。

二人は銃弾を撃ち尽くし、呆然と夜叉を見上げた。おもむろに夜叉の手が伸び、警官の胸をえぐった。

胸に沈んだ腕に、一瞬力が入ると、警官は白目をむきその場で倒れ息絶えた。

もう一人は慌てて逃げ出そうとしたが、時既に遅かった、背中から沈み込んだ腕に、

同じように力が加わった途端、もう一人の警官もその場で息絶えた。署内は完全にパニックに陥っていた。夜叉はどんどん榊を追い詰めたが、

皆は怖がり誰一人助けようとしなかった。実際に助けようがないのだ。

銃も効かない宙に浮く鬼に、非力な人間などなす術もないのだ。

壁際に追い詰められた榊に夜叉の手が伸びた。

その時、夜叉の背後で女の声が響いた。

「弘子、やめて」

美子の声が夜叉の動きを止めたのだ。振り向く夜叉の顔が、急に綺麗な顔へと変わり、

その目は悲しそうに美子を見つめた。

「お願い。弘子。もう止めて」

美子の頬を大粒の涙が流れた。

次の瞬間、夜叉の顔は酒田の顔に戻り、宙に浮く体が床に崩れ落ちた。

美子は泣いていた。その場に力なく座り込みただ泣き続けた。

警官も誰もその場から動けずに、時間だけが無情に過ぎていった。

## 4章（2）最終話

この事件は、署内でも封印された。署長以下全員が口を閉ざしたのだ。

超常現象は報告書に記入されない。記入しても誰も信じないからだ。命を落とした二名の警官は、訓練中の事故として内密に処理された。二人の死因は心臓麻痺。外傷も無くショック性の麻痺と診断された。しかし榊は見た。

榊だけではない、多くの警官がその一部始終を見ていたのだ。

夜叉と化した酒田が心臓を握りつぶすのを……。

無論のこと、酒田には一切のお咎めはなかった。有ったとしても立証できない。

里美にはショックが強すぎた。野口を失ったことを、どうしても信じられなかった。

葬儀の時にもただ、ぼんやりと座っているだけだった。

その時美子は初めて野口の同僚から、二人が長く付き合っていたことを、知らされたのだ。

美子は、里美にかける言葉が見つけれなかった。

翌日、里美の両親が実家へと連れ帰った。

美子も見送りに行ったが、車の後部座席に座った里美は別人のようだった。

ぼんやりと一点を見つめ、見送りの美子の顔さえ見なかった。酒田は責任を感じていた。

弘子を甘く見ていたのだ。まさか自分に憑依するとは、思いもしなかった。

しかも、弘子の力は徐々に強まり、力の範囲を広げていたのだ。

今では、アパートの外にも影響を与え始めていた。

住人は、一人また一人と、アパートを去り始めた。

引越したくても引越せない住人が、僅かに残っているだけだ。

それでも夜は、どこかに泊まりに行くのか、アパートで夜を明かす住人はいなかった。

酒田は自分の身体の前と後ろに、二枚の護符を貼り付けた。憑依されないための手段である。

その上に、念仏の書かれた襦袢を羽織った。

最終的に酒田の装いは、巫女にも似た姿に仕上がった。

決戦に向かうのだ。もちろん美子も同行した。

恐ろしい光景も目の当たりにした。

恐怖もあるが、弘子をこのままにはしておけなかったのだ。櫛は商店街までの同行だ。

美子にも櫛にも、護符は渡されてはいたが、安心は禁物だ。

美子と酒田が坂を上り始めると、辺りは霧に包まれ始めた。

見上げると更に濃い霧が、アパート全体を包み込んでいた。そのうち小雨も降り出した。

商店街に着くまでは、夏の日差しが眩しかったにもかかわらずに……。

酒田は念仏を唱え続けていた。

ゆっくりと坂を上りながら、美子にも弘子の存在がヒシヒシと伝わってきた。

懐かしさと邪悪さの入り混じった、不思議な想いが、美子を包み始めた。

「来るな。帰れ」

聞こえる声は、弘子とは似ても似つかなかった。

「酒田さん……」

美子は思わず袖を引っ張った。

「惑わされては駄目。弘子さんのことだけ考えて」

酒田はまた念仏を唱え出した。

美子は三人で写った写真を、しっかりと胸の前で抱きかかえ、弘子の姿を心に描いた。

「来るな」



更に声は強まった。美子の心に描いた弘子が笑う。団子を食べながら笑みを浮かべる。

転んだ弘子も照れくさそうに笑う。

「来るな……。来ないで……。お願い」

声は次第に弘子の懐かしい声に変わった。

「酒田さん……」

「集中して！」

美子は更に強く心に描いた。

「美子、お願い。それ以上来ないで」

弘子の悲しそうな声が耳に響いた。二人はアパートの玄関に辿り着いた。

壁の彫刻が二人に向き直り、不気味な咆哮を上げた。

建物に絡みつく蔦は、ざわざわと音を立ててざわめき、二人の侵入を拒んでいるようだった。

「相手は私たちを恐れているわ。負けないで。しっかりついて来るのよ」

酒田は美子の手を握った。玄関ホールから見た中庭には、黒い霧が渦を巻いていた。

そして、竜巻のように天まで昇っていたのだ。激しい風が容赦なく二人に巻きつく。

「何している。あんたたちは誰だ」

あるう事が大家が顔を出したのだ。しかし、大家にはこの状況が見えないらしく、

怒りの形相で二人に向かってきた。

「ただでさえ、住人が出ていつているのに、まだ騒ぎ立てるのか」  
大家にしてみれば怒りは当然だ。

巫女みたいな服装の女がいれば、またもおかしな噂が流れると思ったのだ。

怒りに任せた手が、美子の肩に触れたとき、大家は吹き荒れる風に巻かれ、

中庭まで飛ばされた。大家の怒りが弘子の霊を呼び寄せてしまったようだ。

それでも大家には何も見えなかった。

大家に目には、激しい風も黒い霧も見えてはいないようだった。驚いて辺りを見回す大家の眼は、見えない恐怖で見開かれていた。

「な、なんだ、なんだ」

そのうち大家の身体は宙に浮き始めた。そしてグルグルとまわり始めた。

「た、た、助けてくれー」

美子たちには見えていた。大家は竜巻状の黒い霧に包まれ、浮き上がっていたのだ。

大家の身体は回転速度を急に上げた。

しかし、大家が悲鳴をあげる間もなくその身体は鋭くねじれ、ばらばらとなって四方に飛び散った。

美子は目を覆った。とても正視できなかったのだ。

酒田は大家のための祈りを捧げ、美子の手を引っ張った。

「行くわよ」

巻き起こる風に止む気配は無い。

それどころか、玄関ホールの階段を上り、二階の廊下に出た二人を、更に強い風が襲いかかった。二人は廊下の手摺につかまり必死に風に立ち向った。

正面に見える弘子の部屋のドアは、今は跡形も無く消え、どす黒く永遠と続くような闇が中へと続いていたのだ。

商店街の櫛には、アパートを取り巻く霧が見えていた。

天まで届く竜巻も、しっかりとその目に映っていたのだ。

櫛も弘子に接触した一人だからこそ、見えたのだろう。櫛は心配だった。

あの中で、何が起きているのか、二人は無事なのか、それさえ見当も付かなかった。

しかし、櫛は動けなかった。酒田と約束したのだ。

「彼女は、人を殺すたびに力をつけるの。貴方まで命が奪われるようなことが有っては、

私でも勝てなくなるの。だから絶対に近づかないで」と。

柵にはもはや見守ることしか出来なかったのだ。美子はまたも弘子の声を聞いた。

「何故、来るの？何故、私の言葉を聴いてくれないの？冷たくなつたわね」

最後のほうは弘子の声ではなかった。憎しみのこもった太い声だった。

美子は首を激しく振り、耳に聞こえる声を振り払った。

「そうよ、惑わされないで」

一瞬、吹き荒れる風が収まった。

「今よ」

酒田が美子の手を引っ張り、どす黒い闇へと飛び込んだ。

飛び込んだ闇の中は外とは正反対に静まり返っていた。

しかも色彩の無いモノクロの世界だ。キャンドルの灯りだけが部屋に浮かんていた。

「これは……」

美子が呟いた。

「彼女の心の世界よ」

酒田は美子の手を引いて、ゆっくりと踏み出した。

「見て。彼女が絵を描いているわ」

見ると、弘子がキャンバスに向かっていたのだ。部屋は弘子の部屋。当時のままだった。

「弘子！」

美子は思わず弘子の名を呼んだ。

「どうして来たの？」

弘子は振り向きもせずになだそう答えた。

「だって、弘子が苦しんでいると思って……」

「美子、ありがとう。でも苦しんではいいいわ。自分で選んだ道だ

もの。

後悔もしていないわ。分かったら帰って。お願い」

弘子の声は優しく聞こえた。しかし、酒田の顔は険しかった。

「貴方の復習は終わったはずだわ。何故、残るの？」

酒田は尋ねた。

「お前には殺された口惜しさが分かるまい。私のように殺されたり、傷つけられたりする女は、まだ沢山いるのだ。私はそんな同胞をこれからも守る。

邪魔立ては許さん」

既に弘子の声ではなくなっていた。振り返ったその顔も、もはや弘子と呼べなかった。

弘子は酒田に飛び掛った。そして胸に手を差し込んだ。

しかし、弘子の手は、何かにはじき返されたのだ。

「ふっ、姑息な手を……。しかし、通じはしない」

弘子の目が光ると同時に、酒田の衣服は剥ぎ取られ、二枚の護符まで宙を舞った。

「恐ろしい」

酒田は必死に念仏を唱え始めたが、弘子には無意味な言葉でしかなかった。

「無駄な足掻きだ」

そう言って酒田の胸に手を差し込んだ。

酒田は苦痛の表情を浮かべ、口をぱくぱくするだけだった。

「お願い。もうやめて！弘子、やめて！」

美子は思わず大声で叫んだ。

「うるさい、美子に何が分かる。受付の仕事を嫌がり、勝手な想像で浮かれるお前に」

美子は驚いた。弘子は知っているのだ。

「弘子……」

「私は卒業さえ出来なかった。納得できる絵も仕上げられなかった。それなのに、美子は私の邪魔をするの？私が選んだ道を邪魔するの

？」

その時は、弘子の顔だった。

「だったら許さない。美子も許さない」

またも恐ろしい形相へと変わりはじめた。

「待って、弘子。優しく皆に好かれた弘子はどこに行ったの？」

写真の笑顔はどこに行ったのよ」

美子は三人で写った写真を、弘子に投げつけた。

写真はゆつくりと宙に浮き上がり、弘子の目の前で静止した。やがて恐ろしい形相は、

優しい懐かしい弘子に戻った。

「昔のことは忘れたわ」

弘子はポツリと呟いた。

「いいえ、忘れていないわ。だって、私を覚えているじゃない。私を心配で見守ってくれていたじゃない」

美子はその場に泣き崩れた。

「美子……」

弘子は酒田の胸から手を引き抜いた。酒田はそのまま床に倒れこんだ。

弘子の胸にも、昔が蘇った。

楽しい美大時代。三人の思い出。厳格だったが優しい父。

そのとき、弘子の中で何かが弾けた。

憎しみとでも言うのか、邪悪な想いが一瞬で吹き飛んだのだ。

元来優しい弘子は、邪悪な存在にはなりきってはいなかった。

ただ、止めてくれる相手がいなかったただけなのだ。

「美子、ごめんね。何一つ忘れてはいないわ。楽しい思い出もすべてね。

でも、分かって？ 私には雄二が初めてだったの。

恋をしたのも、すべてを捧げたのも、雄二が初めてだった。

だから余計に許せなかったの。美子と里美はずっと見ていたわ。友達なもの」

「弘子！」

美子と弘子は抱き合った。美子はワンワン泣き出した。弘子の頬にも、大粒の涙が次々と伝わった。

すると、辺りには穏やかな光が立ち込め始めた。

「美子。私、行くわ。心配かけてごめんね」

美子は弘子を見つめ、小さく頭を振った。

「里美にもありがとうと伝えて、それから、ごめんねとも……」

弘子の姿が薄くなり、光り輝き始めた。

「もう見守れないけど、私の分まで人生を楽しんでね」

そう言い残し、弘子の姿は完全に消え失せた。

辺りの光も同時に消えて、暗い空間が漂うだけだった。

そこには、邪悪な気配は一切感じられなかった。美子は汚れた床の上で、泣き続けた。

「終わったか」

商店街の櫛には、すべてが終わったことが理解できた。

アパートを取り巻く霧は立ち消え、一筋の光が天へと上ったのだ。

「安らかに」

櫛は心の中で祈った。

しかし残念なことに、小雨降る坂を下ってきたのは、美子一人だけだった。

この事件は、誰にも知られることは無かった。

唯一、櫛の手記だけが大切に保管されていたが、誰の目にも触れることはなかった。

美子は画廊の仕事をやめ、また、絵の勉強を始めた。

弘子の意思だけでも継ぎたかったのだ。

里美は田舎に留まり、家事手伝いの日々を送っていた。

悲しみは癒えないが、徐々に元気を取り戻していった。

二人は時々だが連絡を取り合い、疎遠になることは決してなかった。そして二人の会話に、弘子が登場することは、その後二度とは無か

つ  
た  
……  
。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8387d/>

---

怨情 2

2010年10月9日21時59分発行